

新人強化合宿をかえりみて

山地英文

春における強化合宿を通じ、いろいろの事を体験し、またいろいろの事を考えた。今、それをふり返ったとき、強化合宿の持つ意義の重要性を改めて、考え直さざるをえない。

その第1は、「精神的強化」である。これは肉体的強化とともに最も重要なものの一つである。相手が大自然である探検活動においては、いかなる時にも危険が待ちかまえている。それだけに、一瞬の気のゆるみも許されない。もしも、そういったことがあった時、それが死につながることでありうる。そういった活動中に際しての判断力(決断力)、忍耐力、迅速さが強化合宿により、かなり訓練されているのである。苦しみながら、それに耐え、それを打ち破り、そして前進する。そういった行為の中から自然にそれらを会得してゆくのである。

その第2は「団体生活の重要性の認識」である。探検活動を1人でやることは、大変むずかしい。それは常に危険がともなうからであり、ほとんどの場合、1人では何もできないからである。そうなってくると団体生活がどうしても必要となってくる。そして1人でやれないところを2人で、2人でやれないところを3人で、それぞれ協力しあってこそ、はじめて実のあるすばらしい成果が生まれるのである。それをもっと高度化するためにも私達は、あらゆる場所において話し合い、また討論するよう努力しなければならない。

長い前書きとなってしまったが、私が肌で感じ

た強化合宿を以下に書くことにする。

6月3日先発隊として出発。5時頃比良のテント設営所に到着し、さっそくそれにかかった。荷物も割合軽く、たとえ砂が入ったとしても外苑位だろうと思い、内心、楽勝だと思った。ところである、テントの設営が終わってから、いざ砂を入れるという時になって驚いた。いくらでも入れるのである。外苑の重などすでに越し、袋の紐がなんとか出来るというところで、やっと止めるのである。見て驚き、持ってまた驚いた、片手で瞬間的にあがる位で、5分も持っておれそうにない。この時、それまでの自信とゆとりはどこへやら、一瞬にして大きな不安が、ムラムラと目の前に広がった。「こんなにかついで、あの頂上まで……1000mはあるだろう、俺は500m位の山しか登ったことがないしかも、荷物なしで。それでもかなりきつかった。それを考えると……………ああ、俺には無理だ、どうしよう。」「何をいうか、そんな弱気でどうする、探検部員として失格だぞ。おまえの全力を出し切って行けば行ける。バテるなてことは考えるな。おまえがバテるようなら全員バテると思う位になれ。さあ自信をとり戻せ、精一杯やれ、きつとやれる。」そんな葛藤がはっきり読みとれた。「ここまで来たんだ、一か八かやってみよう」そう気を取り直して、第1日目の眠りについたのである。

6月4日、いよいよ登るきわになって、キヌリングをかついだ時、これまでにかついだことのな

い大変な重さだった。しかし、昨晚の考えからあまり動揺することもなかった。「この重さでは、誰かがバテるだろう」内心そう思った。それが自分であるかもしれないし、あるいは、他の者であるかも知れないが、はたしてone ピッチ目でバテるものが現われた。さすがにその時、心の不安はかくせなかった。しかし、それを押えるためにある先輩のいう所までは行ってやろうと、心に誓った。苦しみながらも、そこへ来た時、「まだまだ行ける、やればできるではないか。その調子で行け！」と言う心理的助言が、又先輩の励しがどれ程自分に役立ったことか。

2日目のlastピッチには自分には、やれたという心的安堵感と、精神的弱さの克服という2点が大きく内的に、クローズアップされた。

本当はこんなことで安堵すべきではないのかも知れないが、私にとっては、はじめての登山であり、自分の足で40kg余のキスリングをかついで頂上についた時、こんな気持ちになったのは、私だけだったろうか。

3日目は、2日目の勢いに乗って、又、今日は砂が捨てられるという事もあるって、大いに気が入った。そして、楽勝ムードとまでは行かないが、かなりの余裕をもってカナクソ峠まで行くことができた。それは、自信と先輩の激励のおかげであろう。1人で行けと言われた場合、たぶん、何度も何度も休んで、あそこまで行けたかどうか疑問である。

また3日目の夜の楽しかったことと、心の底から楽しめた。あの時、主将を琵琶湖に投げ込んでいたらもっと楽しい思い出となったであろう。に、残念！

いずれにせよ、一大事業をなしたという喜びと自信が心の底からわいてくるようだった。かつて、あれ程、充実した日を送ったことがなかったと思う程である。

以上のように回顧してみる時、強化合宿がいかに「精神的強化」と「団体生活の重要性の認識」に役立つかわかる。

やまじ・ひでふみ（法学部学生）

